

大学生における対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究

1007044
奥田 深月

【目的】

今まで、対人魅力と対人関係の関連についての研究は数多くあるが、嫌悪感情と対人関係の関連についての先行研究は数少ない。従来の研究で扱っているものは憶測の嫌悪感情にすぎず、それを現実場面においてもあてはまるものだとするには不十分である。したがって、本研究では、現実到我々が他者に抱いている嫌悪感情に焦点を当て、被調査者が現在あるいは過去において実際に嫌悪感情を抱いた他者について、嫌悪感情尺度を明らかにすることを目的とする。また、被調査者の性別と嫌いな他者の性別の組み合わせによって嫌いな他者の特徴に差が生まれるかについても検討をする。

他者に嫌悪を抱いた場合に、その他者を嫌いだと感じた背景にある自己側の原因を無視することはできない。したがって、認知者である被調査者の性格特性が嫌いな他者の特徴にどのように影響しているかについても検討していく。

【方法】

被調査者は、札幌市内の大学に通う大学生 221 名（男性 80 名、女性 141 名）であった。

質問紙の内容は、① 被調査者の学年、年齢、性別、②嫌いな他者の性別、③ 嫌いな他者の特徴について、斎藤（2003）の「対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究」の分析で使用された 59 項目の中から改善した 34 項目、④被調査者の性格特性について、柳井・柏木・国生（1987）による新性格検査から 12 の特性について各々 3 項目ずつ選抜した計 36 項、であった。③と④については 5 件法で回答させた。

【結果と考察】

まず、対人的嫌悪尺度を作成するために、嫌いな他者の特徴について因子分析（重み付けのない最小自乗法、プロマックス回転）を行った。「相手の傲慢さによる嫌悪」、「自分との相違による嫌悪」、「相手の外見による嫌悪」、「相手への妬みによる嫌悪」、「相

手の不潔さによる嫌悪」の 5 因子が抽出された。

次に、被調査者の性別と嫌いな他者の性別によって、嫌いな他者の特徴に差が生まれるか検討するために、「男 - 男群」「男 - 女群」「女 - 女群」「女 - 男群」の 4 群間で、各因子得点を対応なしの 1 要因分散分析を行った。「相手の外見による嫌悪」で有意な主効果が見られ、「女 - 女群」より「女 - 男群」の方が得点は高かった。「相手の不潔さによる嫌悪」で有意な主効果が見られ、「女 - 女群」より「男 - 男群」、「女 - 女群」より「男 - 女群」の方が得点は高かった。

続いて、被調査者の性格特性が嫌いな他者の特徴にどのように影響しているかを検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。「相手の傲慢さによる嫌悪」は、被調査者の「神経質」と「共感性」が有意であった。「自分との相違による嫌悪」は被調査者の「持久性」が有意であった。「相手への妬みによる嫌悪」は、被調査者の「社会的外向性」、「自己顕示」、「抑うつ性」、「非協調性」が有意であった（表 1 参照）。

性格ではない要素で嫌悪感情を抱く場合、性格特性はあまり重要ではないが、相手の性格を嫌う場合、自己側の要因である被調査者の性格特性は無視できないことが明らかとなった。このことから、見た目などで「嫌い」と判断するときは性格特性ではない他の要素があるといえる。

表1 「被調査者の性格特性」と「嫌いな他者の特徴」の間の重回帰分析結果(標準化係数)

被調査者の性格特性	相手の傲慢さによる嫌悪		自分との相違による嫌悪		相手の外見による嫌悪		相手への妬みによる嫌悪		相手の不潔さによる嫌悪	
	心	身	心	身	心	身	心	身	心	身
社会的外向性	-.02	.02	.02	.02	-.19 *	.00				
神経質	.15 *	.11	.08	.10		-.12				
劣等感	-.02	.02	.01	.16		-.04				
自己顕示	.03	.10	.09	.19 *		.01				
攻撃性	.09	-.10	.05	-.06		.00				
持久性	.10	.17 *	-.03	-.01		-.01				
活動性	-.04	.06	.01	.10		.05				
進取性	.05	-.02	.05	-.01		.15				
抑うつ性	.00	.11	-.01	-.14 *		-.01				
共感性	.27 ***	.14	.03	-.04		-.02				
非協調性	.14	-.02	.06	.16 *		.08				
規律性	-.02	.06	.09	.02		.03				

* $p < .05$ *** $p < .001$

(指導教員 豊村和真教授)